

10月13日 常識

「そんなん、大人の常識やろう」と、昔、教頭先生に怒られたことがある。何をしでかしたのか全く覚えていないが、この言葉だけがいつまでも心の中にある。言葉の裏にある「お前は子どもか」に反応したのではない。「常識」という言葉に引っかかったのだ。

生徒にはよく「常識は人の頭の数だけある」と教えてきた。その人が「常識」だととらえているものが、他人から見れば「非常識」であることが往々にしてあるからだ。例えば、私の家では朝食前に歯を磨く習慣があったが、友人の家では食後に歯を磨いていた。我が家はみな顔顔を揃える朝食時に、顔を洗い歯を磨いて食卓につくのが礼儀であり、友人宅は虫歯予防のため食後に歯を磨くのがルールであった。ことほど左様に、自分の中では論理的に「常識」であっても、人の目には論理的に「非常識」に映ることがよくあるのだ。

同じような言葉に「ふつう」がある。先日ある議員が「ふつうに結婚してふつうに子どもを産み」とLGBT問題について発言し、批判されていたが、自分の「ふつう」を押し付けて、人の「ふつう」を否定してはならない。

私が授業の中で大切にしていたのは「なぜ」と「気づき」。「常識」や「ふつう」を疑うことから「なぜ」が始まり、その中での様々な発見が「気づき」を生む。このプロセスこそが「学び」であり、「理解」につながっていくのだと、今も信じている。

